

ひょうご経済・雇用活性化プラン推進会議 [第2回] 議事要旨

- I 日時：平成29年10月23日（月）13：00～14：45
- II 場所：兵庫県公館第1会議室
- III 出席者
構成員：16名（別紙1のとおり）、オブザーバー：兵庫労働局長
県：副知事、産業労働部長 他
- IV 次第
1 議事：「ひょうご経済・雇用活性化プラン」の今後の施策展開の方向性
- V 主な内容
 - 1 開会
 - 2 金澤副知事あいさつ
 - 3 議事
 - (1) 当局資料説明
当局から議事に関する資料を説明
 - (2) 意見交換
別紙2のとおり
 - 4 金澤副知事あいさつ

出席者(構成員)(16名)

今西珠美 流通科学大学人間社会学部教授
植村武雄 神戸商工会議所副会頭
大浦由紀 株式会社セラピット代表取締役
加藤恵正 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授
北野美英 日本イーライリリー株式会社コーポレート・アフェアーズ本部長
坂本賢志 株式会社アシックス スポーツ工学研究所 IoT担当マネージャー
佐竹隆幸 関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授
田淵真也 農事組合法人丹波たぶち農場理事
辻芳治 日本労働組合総連合会兵庫県連合会会長
本丸勝也 兵庫ベンダ工業株式会社取締役
牧村実 公益財団法人新産業創造研究機構理事長
三渡圭介 兵庫県商工会連合会理事
安原宏樹 魚の棚東商店街振興組合理事長
湯川カナ 一般社団法人リベルタ学舎代表理事
横山由紀子 兵庫県立大学経営学部教授
吉田達樹 兵庫県経営者協会副会長

議事要旨（意見交換）

○座長

いつも皆様からいろいろな御意見をいただいておりますが、本日も自由に御発言いただければと思います。

本日は「ひょうご経済・雇用活性化プラン」の今後の施策展開の方向性がテーマになっています。まず、当局から御説明いただきます。

資料説明

○座長

資料1の今後の施策展開の方向性が、事務局としても皆様に御議論いただきたいところだと思います。3つの視点に分かれており、1つ目が産業構造、2つ目が人材、3つ目として交流・グローバル化がキーワードになっています。

それでは、皆様から御意見をお願いします。

○A委員

やはり大きな問題として中小企業の事業承継の問題がありますが、それと並行に、いわゆる2018年問題、人手不足の問題が深刻になってきており、兵庫県としても様々な施策を打ち出されてきました。例えば、第二新卒者に対しては奨学金返済支援。女性の活躍については、国の施策の流れがあります。

1点不足していると言えるのは、アクティブシニアの問題です。大企業のいわゆる先が見えてくる人材で、概ね50歳ぐらいから75歳ぐらいまで25年間あります。その状況をどう使うのか。60歳を過ぎると、シルバー人材センターなどで、生きがいを求めて働かれる方がおられます。それは構わないと思いますが、社会や地域、企業を支える人材が活躍するための窓口や斡旋先、企業との出会いの場が不足していると感じますので、リクルート方法やキャリア支援の制度整備が必要かと思います。例えば、社会人大学院で高齢で資格を取って、できるだけ働きたいという方、あるいは技術職で、自分の技術をさらに生かしたいということで働かれる方も数多くおられます。

2点目は、人手不足の問題で、特に深刻なのは中小企業です。県では、中小企業の魅力を再発見していただくということで、冊子の作成に取り組んでいます。もともと企業の魅力づくりの発端は、1996年に「担保主義補償制度によらない融資制度の確立」という提言が国でされまして、いわゆる決算書の世界だけでなく、何がしかの方向で企業を評価し、企業信用力、地力を高めようということだったと思います。その後、経営革新や新連携、地域ブランドなど様々な制度ができました。大企業との流れの中で考えると、いわゆるCSRが重視されるようになり、ESG投資というものが最近クローズアップされています。ESGは頭文字を取っており、Eは環境（Environment）、Sは社会や地域（Social）、Gはガバナンスです。例えば、女性が働きやすい職場環境を整えるのはG。地域にとってなくてはならない企業、地域貢献をするのはS。環

境にやさしい会社づくりの取組はEになります。中小企業も、こういう形で学生や地域の人たちにアピールすれば、積極的に投資につながります。地域の中でお金が動くような、地域内再投資のシステムのための施策が何かないかと考えています。

3点目は、大企業を誘致しても必ずしも雇用創造につながるものではありません。来てもらうことも非常に大事ですが、「逃がさない」「潰さない」「やめさせない」、この「3ない」の施策が充実すれば、中小企業の定着や雇用、地域内再投資にも非常に有用かと感じています。

OB委員

女性の就業に関して、2点申し上げます。

1点目は、女性の就業意識に働きかけるような工夫がもう少しあってもいいのではと思います。たとえ環境整備ができたとしても、女性自身が働きたいと思わなければ働かないからです。こう申し上げると、働きたくないのであれば働いてもらわなくてもいいのではないかという意見が必ず出ますが、この意見が実は問題で、それを放置した結果が今の子供の貧困率や家庭の格差、子供の教育の問題につながっています。

今の時代は3分の1が離婚し、そのうちシングル家庭の半分は貧困状態になります。その理由は女性に経済力がないからですので、女性が働くということは自分自身、あるいは自分の子供、家族を守るための方法だということをもっとアピールした方がいいと思います。

特に再就職の場合はもちろん、例えば大学生や、あるいは妊娠が分かって仕事を続けるかどうか悩んでいるときなどにこういった情報があると、継続する覚悟が決まる部分がありますので、タイミングを見た、若い世代への就労意識への働きかけの仕組みがあるといいと思います。

もう1点は、女性の労働力としての位置づけです。女性を単なる働き手と捉えている雰囲気がありますが、これからの時代は、むしろ戦力となる人材として活躍してもらう必要があると思います。その場合、もちろん両立支援策は重要ですが、それだけでは不十分と言われていて、同時に均等推進施策を強力に進めていく必要があると思います。最近の研究では、就職後の早い段階でチャレンジな経験をしたり、やりがいや充実感を感じた女性は、その後も高い就業意欲を持ち続けるという結果があります。ですので、均等施策も推進いただければと思います。

OC委員

商店街の活性化に関して、少し違った観点から見ることができましたので、それについて御報告します。

私ども中山間地で商工会があるところは田舎です。そして、活性化のために皆さん特産物を作っています。しかし、直売所や道の駅など、それぞれの地域の中で売っています。それを求めて都会の人が来られますが、田舎から都会に出て行くことの方が大事だと思うことがありました。

元町4丁目の商店街と縁があり、昨年、シャッターを閉めている店舗で2日

間、田舎から持って行った特産品を売ると、全部売れてしまいました。今年も行いましたが、ほとんど売れてしまいました。この商店街ではシャッターを閉めている所が多く、こんなに疲弊しているとは夢にも思いませんでした。この都会の商店街の疲弊と田舎の特産物をマッチングさせる仕掛けや、都会と田舎との情報交換がうまくいけば、そんなにコストをかけずに、おもしろいことができるのではないかと感じています。

もう1点は、林業です。中山間地には森林がたくさんあります。植えて育てるのが林業です。しかし、50年、60年育ったものをどう売るかということ自体をしないので、諸外国からどんどん攻め込まれています。外国の林業では、ロジスティックが簡素化されています。日本では、膨れ上がる運搬費等の経費縮減が難しいです。そういう状況をぜひ兵庫県から発信して、どう凝縮し、育てたものをどう売るかという観点で林業を見つめなくては、外材に押されたままとなります。燃料用を含め、木材の自給率は35%しかありません。たくさんある森林をもっと有効に生かす施策を積極的にやっていただきたいと思います。全国で林業と建築とを合わせた動きが出始めました。それを我々もやっていかざるを得ないと思いますので、そのあたりの施策を御一考願いたいと思います。

OD委員

まず、中小企業の事業承継について、オーナーシップの承継もありますが、顧客や技術を含めた事業そのものを継続するため、M&A型のマッチングを成立させる。こういう施策の中心は国かもしれませんが、県でもその土壌はお考えいただけるのではないかと考えています。

次に、若い働き手の定着を議論する際にいつも思うことは、それぞれのライフステージにおいて、ワーク・ライフ・バランスを考えなければならないということです。若い人は意外と堅実で、どこに定住するかを考える際には、老後の姿を意識していると考えられます。老後はこう暮らしたいという環境を作れば、UJIターンを含めて、人口定着への大きな力になるのではないのでしょうか。具体例として、CCRCというものがあります。ある程度知識や技術があるアクティブシニアが、大学の近くで学生と共生しながら、ある程度レベルが高い仕事をフリーランスでできる拠点があれば、その地域で働きたいという姿が描けて強みになると思います。

あとは、検査・試験ビジネスです。例えば、輸出入に関して条件が付いているときは、商工会議所がサーティファイすることがあります。ある種の認証・公証的な認証ビジネスと言うのでしょうか。そういう検査・試験の拠点に兵庫県がなれば、そこで認証を受けたいという事業所が入ってきますので、目指すべき一つの方向ではないかと思っています。しかもそれは、必ずしも都市部でなくてもできると思います。

それから、輸出入は、IoTの進化もあって、モノからコトへと変化しています。ここでの一つの力が、産官学の連携です。例えば、新幹線や水道事業などの公益的事業の輸出に関して、公的な基準や行政としての許認可も含めた

様々な仕組み、安全確保のための仕組みも含めて海外に売り込む。それをもとに、地場のものづくり企業がものを売ります。そのものにシステムをくっつけ、行政上の許認可的なシステムを含めて、全てをまとめて新興国や途上国に売り込むというビジネスに取り組んでも良いのではないかと思います。

最後に、ダイバーシティの考えからすると、女性だからとか、高齢者だからという議論ではなくて、老若男女、それぞれ人の個性があります。そういうそれぞれの個性をそのまま受け止め、うまく戦略化するという時代に入っている気がします。個性をうまく活用して成果に結びつけるような、生産性の高い働き手集団の運用について、真剣に考えるべきではないかと思います。

○座長

フリーランスという話が出ましたが、かつてダニエル・ピンクという人は、フリーエージェント社会が来ると言いました。ネットワークで結ばれた個人事業主が、社会で大きな役割を果たしていると指摘しましたが、そういう地域版ということになるかもしれません。海外に日本のインフラ技術を輸出することも重要だという御指摘もありました。これも宇沢弘文という人が、社会的共通資本の中には制度も含まれると言ったことがあります。地域でたくさん維持できている仕組みそのものをインフラとともに輸出していくという発想でやらどうかという御指摘でした。

○E委員

私は起業家として起業支援に入ることが多いですが、違和感がありましたので、そこを追加資料としてまとめました。

若者の起業が進まないことについて、若者は就職の条件として、2017年卒で、「安定している会社」や、「福利厚生」や「給料」が過去最高となっているぐらい、安定を求めています。なぜかというと、奨学金の問題で、本当にお金がありません。7割がアルバイトをしていて、5割が奨学金を返さないといけない。卒業時点で、300万円強の借金を背負っている。とすると、どうしても給料が高い会社を選びやすいです。

次に、起業に関する課題と分析で、起業家が起業するときを感じる不安をまとめてあり、やはりお金がかかる。でも失敗したら取り返しがつかないということで、若者が最も不安を感じています。そこを起業させるのは本当に大変なことです。なので、環境を整えても、本人たちに起業したいという意識を持ってもらわないと実効性はありません。3つのポイント、①お金がかからず、②現在の生活を維持したままスタートでき、③失敗してもやり直すことができる環境を整えないと、安心して起業できないのではないかと思います。

次に、私たちが現場で提案しているのは、起業ではなくて、事業づくりです。皆が会社を興したい訳ではありません。会社となると、大きくて重いし、お金もかかります。アメリカ型のビジネスコンテストでは、投資家が回収を急ぐ傾向があります。アメリカでは何度でもチャレンジできますが、日本は再チャレンジがしにくく、失敗した人がそのままになりやすい状況です。そこで、コミュニティ、地域を活性化する起業、なりわいを作っていくモデルを作れば良い

のではないかと考えています。リーン・スタートアップ（小規模起業）という、プロジェクト単位で少額の資金と協力者を募り、今の生活を維持したまま、副業でも何でもいいので、学生でありながらスタートできる手法があります。反応を見ながら事業を進めて、うまくいくと思ったらさらに進めることができます。そうやって始めた地域を拠点にした会社は、大きくなっても恐らく地域にとどまり続けます。年をとってからでも、自分が育ててもらったコミュニティの中で地域に還元しながら、また次の世代を育てていくという行動に出るのではないのでしょうか。地域の未来をともに作っていく事業者がたくさん出ることが必要だと思います。

それで、私たちの取組では、未来なりわいオーディションという形で、例えば、こども食堂をやりたいという方に出てきてもらい、地域の企業や行政がアドバイスをします。そこでブラッシュアップし、トライ&エラー資金として3万円を出して、そのレポートをもらい、皆で共有しています。子供からチャレンジしていけるので、学生さんたちも安心して起業して、チャレンジできるようになります。

もう一つ、専門家の方々に、まさにフリーランスの形で、主婦、シニア、会社員、学生、企業とプロジェクト単位で事業を起こせるプラットフォーム作りが必要です。そのために、ブロックチェーン技術を活用した「スマートコントラクト」という仕組みを使えば、低コストで企業づくりができる社会になるのではないかと考えています。研究を進めています。福岡ではイーサリアムという仕組みを入れています。ぜひ兵庫・神戸でも取り入れていただきたいと思っています。兵庫なら自分のやりたいことを仕事にできる。それを地域の人が寄ってたかって支援する。そういうあたたかい事業がどんどん起こっていく地域になれば、兵庫県に就職したい、ここで子育てをしていきたいという場所になるのではないかと考えています。

○F 委員

障害者雇用について、兵庫県の介護医療等ロボットの普及実用化促進事業の助成金で、ロボット義足のスポーツシューズを開発しています。この義足の特性を分析した上で、それにマッチングするシューズを開発すれば、義足の方の活動性が非常に上がることが分かりました。つまり、シューズ等によって活動性を上げられれば、健常者と近い動きができるのではないかと感じています。ですから、義足は既に保険の対象かと思いますが、この機能を搭載した安全靴が保険の対象になれば、片足が義足の方や高齢者で片足麻痺の方の活動性が上がり、これまでできなかった仕事場にもつけるのではないかと考えています。

もう一つは、スマートウォッチを使って、聴覚障害者が安全かつ効率よくマラソンができるような実験を神戸マラソンで実施します。このウォッチ一つで、スマートフォンを持たなくとも、応援者のメッセージや風向など様々な情報が表示されます。これを使えば、聴覚障害者の方が工場のラインに入ったときに、何か情報が入ると、腕にバイブレーションが当たるので、工場内での指示が伝わります。工場のラインでは、コンベアに物を巻き込んでしまうと機械が止ま

りますので、スマートフォンの持ち込みは良くありません。腕時計だとそれが比較的許されるケースがありますので、これを使うことで、障害者雇用と言いつつ、健常者に近い形で雇用できる可能性があるのではないかと思います。

○座長

兵庫県は障害者に対してこういう支援をしている、ということが競争力になっていくという、非常に大事なことだと思います。健常者と同じラインに障害を持っている方が立てるといふサポート、そこに投資をすることで一緒に働いて税金を納めていただいて、生きがいを持っていただくというのが一番良いことだと思います。そういう意味で、同じラインで働けるよう制度、仕組みを形にしていくことは重要で、県でも御検討いただければと思います。

○G委員

若者の県内就職についての提案です。西日本最大級の産業総合展「国際フロンティア産業メッセ」が、毎年9月に2日間、神戸で開催されています。毎年、3万人の来場があります。昨年、知事から県の高校生にも来場を呼びかけようと話があり、1,500人の高校生が来られました。須磨学園からもたくさん来られて、学園長から段ボール1箱の感想文が届きました。そこに書かれていることがうれしいことばかりで、「県にこんなものづくりメーカーがあったことを全然知らなかった。」「自社の製品・技術への愛着を持って、高校生にも非常に熱心に説明してくれたので驚いた。」「メーカー企業では、経営企画などものづくりのど真ん中に文系の仕事あることを知った。文系だけどメーカーに勤めたい。」「数学教師を目指していたが、エンジニアに関心を持った。」等の反響が寄せられました。高校生、特に文系の人たちが、全然知らなかったこういう技術、製品、人に触れることができました。そして、非常にインスパイアされ、心に残る体験をされたようです。

県内には様々なおもしろい企業があります。企業ガイドブックも一つの手で、冊子から担当者の思いを見る。あるいは今申し上げたメッセで直接触れる。直接、技術者や営業の方と話をすることが大事だと思いますので、ぜひ県でも様々な手段でそういう場を設けていただき、就職活動の段階では遅すぎますので、できるだけ若い、高校生、大学生の間にやっていただきたいと思います。

○座長

資料1の右側に次世代産業について書かれています。兵庫県はSpring-8など産業支援施設がたくさんありますが、これらが今後どのように、兵庫県経済に貢献できるのか、あるいは次世代産業の展望はこういうところから開けるのかということが一つの疑問ですが、このあたりはいかがでしょうか。

○G委員

企業は3つの視点（今日・明日・明後日）で見えています。今日は、クオリティ、コスト、デリバリーです。品質の問題で、これは一丁目一番地であり、しっかりしたものを納めることです。明日は、現事業の中の延長の新製品です。明後日は、今までとは違う新しい分野です。ただし、自分たちのコアを生かしながら進めないといけません。この明後日がよく言う4分野（航空、水素に象

徴される環境エネルギー、健康医療、ロボット・AI・IoT)です。この4つの分野は、なかなかコモディティ化しません。今やもう、あらゆるものが価格競争になってきています。ライバルは海外、新興国です。こういう今日の価格競争から、明後日に抜け出さないといけません。それは今から仕掛けないと、とても無理です。企業は今日のクオリティーづくりと、明日の新製品で手一杯ですが、明後日の4分野へと事業構造を大きく変えないといけません。

その種まきのためには、呼び水のような県の施策が大事だと思います。航空機の非破壊検査では、白黒を判別することが非常に重要ですので、一企業でやるよりも複数でやる方が良いです。今は地域間競争で、名古屋・岐阜は航空機を組み立ててはいますが、部品は関西から運んでいます。ですから、関西に中心を取ってくる施策が重要だと考えています。

○H委員

先日、在日米国商工会議所で行われた対談に出席し、IR(統合型のリゾート)の大阪への誘致のお話を聞かせていただきました。関西でそういう起爆剤になるような産業が出てくるのに当たって、果たして関西が準備できているのでしょうか。人材力や国際力という観点で、隣の兵庫県としても一つの起爆剤として一緒に取り組めると思いますので、ぜひこういうことも含めた未来像を作っていただければと思います。

次に、女性の活躍について、個性を生かす就業ということは意識していただいたと思いますが、例えば、女性の雇用の数値を上げていくというメジャメントによって女性の雇用体制を確立することもできますし、そこに必要な就業支援も確立できると思います。ですので、女性の就業促進の原点として、引き続きお願いできればと思います。

○I委員

自動運転に関するお話をさせていただきます。

来年3月に淡路島で自動運転の実証実験が始まります。そういった実証実験、それから自動運転の関連産業の促進を継続的にやってみてはどうかと思います。自動運転技術には、AIによる画像認識、コネクティッドカーと呼ばれるIoTによる車同士の通信や車と信号機との通信など、第4次産業革命と言われる技術が全て組み込まれています。私は自動運転の技術に長く関わっていますが、多くの技術者が東海地域や東京、海外など県外へどんどん流出しているという実感が、自社にも業界団体にもあります。

このような中、兵庫県は有利な場所に立地していると思います。海や山、豪雪地帯もあり、自動運転の実験をするには、なかなかほかにはないと思います。その背景として、2016年に、自動運転がレベル4からレベル5まで拡張されました。皆さんがイメージされるような、近未来的な車が自動で動いていくというようなものがほぼレベル5です。レベル4は、同じように完全自動運転ですが、道路の規制や、場所、速度の制限の中で実証できる段階です。限界集落での高齢者の足の確保対策として、レベル4が今大きく取り上げられています。レベル5は、法整備やインフラ整備もあり2025年以降になりますので、

まずはレベル4だというところで、自動車メーカーよりは、大学やIT企業が積極的に取り組んでいると思われま。つい先日、三菱電機の赤穂工場で自動運転車両が展示されたと思います。特に自動車メーカー、IT企業、それ以外でも参画できる技術革新的な要素も多々あると思いますので、県内企業の力を発揮する場所を継続的に作っていただけたらうれしく思います。

○座長

我々は制度、仕組みのことを社会技術と呼んでいます。しかし、これは地域の中に埋め込まれているので、企業の工学的な技術よりも、もしかすると突破するのが難しいです。というのは、そこに既得権が発生していることもあります。ですから、ここを変えていくのが県の最も大きな役割だろうと思います。技術と社会両方の、工学技術と社会技術が両輪となって社会、地域を変えていくということだと思いますので、今の御指摘は兵庫県にとって大変重要な課題ではないかと思います。もう既に技術者が流出しているとしたら、兵庫県は一步遅れてると言わざるを得ない気もしました。

○J委員

前回の会議で私は、中小企業が今の若い人たちの関心を引こうと考えるなら、職場風土の改善に努力すべきだし、その具体的な成果をアピールしやすくするための仕組み、認証・評価システムを兵庫県主導で作っていただけないかと提案しました。本日の資料1の7ページ、ワーク・ライフ・バランスの推進の中で、企業に対するインセンティブ強化と取り上げていただいたと思います。確かに、ワーク・ライフ・バランスという言葉としては世の中に十分に浸透していると思いますが、いわゆる根っこの部分の意識変革はまだまだだろうと思います。したがって、施策充実に向けたインセンティブ策をお願いしたいと思います。

ただ、私が申し上げたかったのは、中小企業の人材不足やUターン対策、第二新卒への対応という観点からすると、中小企業の顔を見えやすくすることがポイントだと思います。そういう意味で、ワーク・ライフ・バランスだけでなく、中小企業が取り組みやすいような、我が町クリーンアップ作戦や子供の文化活動支援など、手軽かつ地道な活動を評価するシステムや支援策も考えていただきたいと思います。

少し話は逸れるかもしれませんが、福井、石川、富山の北陸3県は大手企業や目玉産業ある訳ではありませんが、地元就職率は圧倒的に高いです。さらに女性就業率もトップクラスです。実は、全ての高校生が地元で短期の就業体験をしています。その因果関係は証明できませんが、求人側と求職者間でお互いの顔が見えると、身近に感じるからだだと思います。会社の雰囲気、職場風土、あるいはともに働くことになる仲間の姿や表情を伝えることがより大切ではないかと思います。ですので、中小企業でも容易に取り組めるような、身近なCSR活動を評価・支援するシステムあれば良いと思います。

○座長

北陸の県は、暮らしやすさの指標でも常にトップにきていると思います。な

ぜ北陸なのかと思いますが、J委員のおっしゃるあたりが関係しているのかもしれない。顔が見えるということは、情報が共有されていて安心感があるということです。ソーシャルキャピタルという、信頼関係や地域の中の密度の濃い関係性が安心感を生み出すという議論もありますが、これが実は就業体験により培われ、地域の中で就職することにつながっているのかもしれない。

○K委員

観光の視点から、6点ほどお話しします。

一つ目はターゲットです。外国人観光客が少ないことを懸念されていますが、国内と海外の両方を対象にするという視点は忘れないでいただきたいと思います。外客だけを取り入れても、それは一過性で終わってしまいますので、両方を見ていただきたいというお願いです。

二つ目は、交流や相互理解ということ念頭に置いて、観光に取り組むことを忘れないでいただきたいということです。経済性を前面に出すのは心の中ではあっても、具体的には避けていただきたいということと、その交流の性質が相互、一方通行ではないということです。

三つ目は、地元の人が自分の地に誇りを持つということです。これは小さいときからの教育でもできると思います。「逃がさない」ということにもつながってくると思います。

四つ目は、兵庫県は広いのでスポットが点在していて困るかと思いますが。ルートを作ったりしていますが、必ず地域や背景にある歴史を踏まえたストーリーを持たせることが重要です。原材料から最終製品へなど、ストーリーがあれば、その流れや意義、価値を知ることができるので、旅自体も価値のあるものになって、記憶に残りやすいものになると思います。ストーリーがあれば、遠く県内を動くことも負担にならないと思います。

五つ目が、今申し上げた記憶に残るというところで、残させる工夫をすることが重要だと思います。

最後に、観光の魅力となる大きなものに文化、大自然があります。兵庫は大自然というよりは、人と自然がいかに共生してきたのかということの魅力を打ち出すということと、訪れようとする人や訪れる人とその地がどういうつながりがあるのかをはっきりと示すと良いと思います。自分とその地域とは関係があるということが地域への関心を高め、体験型にもつながりますが、関係ができたということが記憶や思い出に残ります。その旅行動も地域に対する思いも強くなり、兵庫県の魅力アップにつながっていくのではないかと思います。

○座長

資料1の兵庫の魅力を生かした誘客の推進のところに、六甲山とありますが、このあたり、御専門の立場からいかがでしょうか。

○K委員

外から人を呼ぶには、六甲山に関しても意味を持たせることが大切です。兵庫の人にとっては非常に親しみがあるなど、ライフスタイルと関連させながら伝えることによって、知らなかった人も来てくれたりということはあるだろう

と思います。必ずその意味を持たせることが大切だと思います。

OL委員

兵庫県は、女性の健康寿命が短いというデータがあります。因果関係は分かりませんが、就業していない女性が多く、65歳以上の就業率もワースト4位です。平均的に13年、不健康な状態で平均寿命までを過ごされているのが現状です。

このような状況で、教育の中で実践力や技術が身につけている人材が出てきているかという点、特に介護の現場は必ずスキルが必要ですが、ここ数年の就職説明会では、介護がやりたいという学生はほとんどいません。さらに何がしたいかも分からず、いろいろなところの話を聞いて決めようという方が多いです。ですので、小学校、中学校ぐらいから職業に触れる機会を与える施策は必要かと思います。さらに、学生と企業とのマッチングがうまくできるような公的な支援はかなり重要だと思います。中小企業では、採用活動にもコストもかかりますので、公的な就職説明会で周知できるパンフレットなどに御協力いただいたりする施策があればと思います。

AI・ロボットについて、介護現場でもかなり進んできていますが、それでも残念ながら人が人にするサービスの現場ですので、やはり人材不足が深刻です。女性や元気シニアの方の活躍は期待していますが、これが雇用なのかボランティアなのか、シルバー人材センターなのか、多様なマッチングをうまくできるような仕組みづくりが必要だと思います。

介護事業を行う中小企業の倒産が、平成28年度が一番多くなっています。今から必要な介護の仕事なのに、中小企業はどんどん撤退をし、経営が非常に厳しい現場です。そこで、どう経営を存続しながらいいサービスをやっていくか。ここに住み続けたいという兵庫県をつくるには、介護・医療現場の活性化は必須だと思います。様々な場面でシニアが活躍し、最後まで元気でいられる地域づくりを県で支えていただけるような、企業も含めて御支援いただけるような仕組みがあれば、中小企業は元気に介護・医療にも携わっていくのではないかと思います。

OM委員

県の商店街活性化に関する施策は手厚いです。ただ、商店街の中でも人材的に厳しい商店街が、県の施策までたどり着いてないというのが現状かと思います。補助金に頼らない商店街を目指すのが大事ですが、そういう商店街ほど補助金を活用するやり方を知っていて、人もいて体力もあります。うちの商店街では、逆に人手不足をどうチャンスに変えることができるかを話しています。こういう発想で、物販でお互いが競争するまちづくりではなくて、観光客に何か体験してもらおうことができないか、このようなことを商店街でも考えていくべきだと話をしていました。

また、地域価値を高めることが重要です。価値が高まれば税収が上がり、上がった税収を再投資してもらおうという好循環を作っていくのが片方。もう片方で、その街の人しか分からないその地域ごとの個性を尖らせる努力が必要だと

思います。これは外部のコンサルタントに導いてもらうことは難しいので、商店街同士の交流が有効だと思います。同じように汗をかいてきたことで、説得力も増します。情報誌に載っていないような生の声を聞くこともできます。元気な商店街とこれから元気になりたい商店街が情報の交流をして、「こちらはこういう形で解決してきた。」という話ができたりするとおもしろいと思います。

○N委員

農業の分野は、兵庫県では割と新しい人が入ってきてはいますが、出ていく、あるいは引退される方々が圧倒的に多いため、全体として人は減っています。そこで、人を増やすか、技術を改革して生産力を高めるかしかありません。AIやIoT、ロボット化という部分は、農業においても発展してきていますが、なかなか導入しづらいところがあります。例えば、収穫した黒豆の選別は、地元のパートのおばちゃんが行っています。自動化した選別機械はありますが、黒い斑点が虫食いか自然な模様なのかを判別できません。AIであれば学習して判別できるかもしれませんが、市場規模が小さくて開発できません。県内の他の特産物にも同様の問題があるので、大手に頼るよりも小回りのできる県内の機械メーカーの方が、開発のマッチングが可能ではないかと思います。

また、水路の自動化について、基盤整備の問題があります。今の田んぼができたのが40年から50年前で、それを何とか維持している状態です。トラクターやコンバイン等の自動化も考えられますが、基盤整備したのが何十年前で均等でないため、なかなか自動化もできません。テストしてもうまくいかない現状ですが、せっきく自動化、ロボット化が進んでいますので、それに見合ったインフラ整備をしてほしいと思います。今の技術性をもって圃場整備をし直せば、自動化されたものも使いやすと思います。こういったことに取り組めば、今の労働力で、県内の農地を守っていけるのではないかと考えています。

○○委員

奨学金の返済支援制度をスタートいただいて、さらに周知をしながら拡充という方向性も打ち出されております。この制度は、県と政令市、中核市でそれぞれ役割分担をしながら全県的な施策でスタートしております。基礎自治体ごとに独自の制度を持たれているところもありますので、県内各自治体の制度を全体的に掌握して、より効果的なものとして中小企業の若手人材の確保、定着に資するような制度として方向づけただけならと期待をしています。

また、企業の魅力アップのための従業員向けの福利厚生などにコストをかけることは、大企業ではできても中小企業だと難しい現状があると思います。そこで、ファミリーパックという制度が県にあり、増え続ける非正規の方の利用促進に力を入れられ、その会費の半額助成をされています。非正規の方に魅力を感じてもらえるようにするためのアプローチは、もう少し検討する余地はあると思いますので、中小企業の福利厚生をバックアップする施策、仕組みづくりについて、若者の人材確保にもつながるように意識しながら、これからの課題として御検討いただければと思います。

○座長

全員の方に御発言いただきましたが、これだけは言うておこうということが何かありましたらお願いします。

○F委員

六甲山の活用について、お話をさせていただきます。

ストーリーというお話がありましたが、おもしろい一例をお話ししますと、高野山で行われているトレイルランニングが「空海の修行の路を走りましょう」と打ち出しただけで、インバウンドの参加者が一気に倍以上に増しました。六甲山も同じことが言えるのではないかと思います。例えば、トレイルランニングに関して、都市から近くアクセスが良いだけでなく、機材等のメンテナンスがしやすく安全だということもあります。世界的に見ても、ある程度の距離が走れ、都市と並列に山がある場所は恐らくないと思います。そこで、ストーリーの例として、一ノ谷の戦いなど、海外の人たちに何かインパクトを与えれば、誘客の手段になるのではないかと思います。他の例として、世界的には例がありませんが、六甲山から見た神戸の夜景を活用したナイトトレイルランというコースを作ることも考えられます。

六甲山の観光活用ということ、コンペのような形で助成金を出せば、様々な意見が集まるのではないかと思います。

○E委員

六甲・摩耶活性化コンソーシアムにおき、ちょうどこの週末に六甲縦走キャノンボールランというイベントがあります。須磨から宝塚までの片道56キロを往復します。これは、15人から始めたイベントですが、現在、応募して2時間程で全国から何千人もエントリーがあつてすぐ埋まってしまいます。市民の方々が自発的にどんどんやっていますので、ぜひキャッチアップし、巻き込んでいただけたらと思います。

○H委員

中小企業においては、高校や中学校に出前授業をすれば、魅力を伝えられ、CSRにもつながると思います。例えば、文系でも製薬企業に勤められるというイメージや、女性が活躍している現場を伝えることもできます。簡単な方法だと思しますので、あわせて御検討いただければと思います。

○C委員

私も国際フロンティア産業メッセに高校生が来ているのを見て、素晴らしいと思いました。私どもも産業展示会を行う際に地元の高校生を呼ぼうとしますが、田舎で電車がありませんので、バスを使うことになります。そうすると、どうしても費用負担が必要となります。兵庫県では、但馬でも産業展をされておられますので、高校生を巻き込んで、地元を知っていただき、定着していただくとするのであれば、移動手段に対する支援が必要になると思います。

○座長

活発な御意見をいただきました。皆様、ありがとうございました。